
中国の現象

劉 新

〈カリフォルニア大学バークレー校〉

現在も進行中であり、その完全な意義も定まっていないうラク戦争は二重の問題を提起している。それは、我々の将来に関する政治の問題であり、世界を確実に安全なものにする政治的な新国際秩序とは何であるべきか、というものである。これは明らかに我々の注意を喚起する緊急の問題である。しかしながら他方で、バグダッドの戦闘、現実の爆撃・殺戮、暴力と流血が、我々がテレビ画面の前で気楽に座り、自宅でみるショー、実演、娯楽となっていることにおそらく気付くことだろう。

これはテレビ上で完全に舞台化された戦争である。すなわち、見たい人は誰も見えるように意図されたものである。テレビ関係者がアメリカ軍の戦車に乗り組み、CNN やその他の衛星テレビ網の24時間報道番組でほとんど数分毎に前線から報告している。我々は新しい種類の戦争を行うに際してのハイテク軍事戦略の力を目の当たりにしている。あらゆる軍人が銃だけでなく、おそらくより重要なのはカメラ、パソコン、携帯電話、現場の状況を目にし、交信し、評価できると考えられるありとあらゆるものを装備している。現場の状況は常にまたホワイトハウスでも見られるようになってきている。戦争のビデオカメラを通じて、我々は技術、特に情報技術の機能を誤解することはないであろう。

我々の前で起こっていることはまさにそのようなハイテク技術の滑稽な悲劇なのである。勇気と決意だけでは戦闘の結果にもはや影響を与えることはないであろう。勝利への鍵を握っているのは技術的進歩の予測と可能性である。我々の世界との関係を形成している技術、特に情報技術の問題が、本稿で私が取り上げたいと願っているものである。世界における中国の地位についての問いに答える代わりに、私は、現在インターネットと衛星テレビで世界につながっている中華人民共和国への情報技術の侵入の問題に答えようと思う。私の論点は、グローバルとは地球が狭くなり、今日旅行できる便利さだけのことではない。代わりに、我々が共有しているのは、衛星テレビ網やコンピューター空間を通じてあたかも旅行しているかのイメージを抱くということである。これが今ある中国であり、今ある世界なのである。情報技術の侵入は我々すべてにとって新しい地理を生み出した。そこでは中国の立地は、地政学的用語で単に定義されたものではなくイラク戦争で我々が見たもの、空間の物理的距離はバーチャル空間で測られたもの、である。もし我々が社会的現実の問題へのアプローチを開発しようと望むならば、吟味が必要なのはこの新しい地理、情報技術の日常生活への侵入、国境・地域を越えたイメージ表現の爆発である。中華人民共和国

の近年の歴史はそのような問いに対する最も興味深く、格好の入り口となっている。

表層の経済

現在この瞬間、経済・社会が変革しつつある世界の中で我々自身の経験を把握するには、我々の分析の中心をなす「社会」あるいは社会的なもの一般、の概念の何らかの吟味が必要とされている。“資本”から“物事の秩序”、すなわち、「生産様式」から「知の考古学」へ、あるいは“文化の科学”から“文化の解釈”へ、すなわち「社会構造」の Radcliff-Brown 流の理解から Clifford Geertz の「荘重な闘い」(deep fight) あるいは「厚い記述」(thick description) へ、深淵で深い構造を持ち、隠れた、日常の視界を超えたものとして考えられている社会世界(socialworld)に関して堅固な仮定が存在してきた。異なる伝統の文化分析では、日常生活における当面の経験を超える構造的深淵や深い構造に従って、社会世界が組織されているとのこの仮定、がしばしば採用されている。最も一般的には、それは経済的・政治的制度、組織の階層的取り決めとしてしばしば定義されている。その中で人々が、これら組織によって支援されたり、支援したりしている規範・価値のマトリックスと結合し、統合し、分割されている。社会世界のこの複雑さは日常の経験によっては直接にはアクセスできないものである。このように考えられる社会世界は認識論的、存在論的意味においてある深遠さを有しているように思われる。それゆえ我々は、社会世界の表層にあるものは何でも深遠な構造的溝あるいは考古学的運動の出現としてしばしば考えるであろう。

海に似た社会の表層は、人類学者が認めるように、永遠の動きを行っているが、大洋の深さのようにその深さはほとんど動いていない。日常的にその深さに押し入ることによって、我々は同胞と接触する。これやあれの特別な科学的象徴システムの優位性に先行することによってのみ(言葉の特別な事例では)、浄化されていない同じ泉を飲むことによって、我々は共同生活を共有している。蓄積した言葉の伝統の雲が戸外の頭上に現れるとすると、交信しようと努力して、解釈しようと試みるが、ほとんどの人は防御の基本さえも展開できていない(Odgen and Richards, *The Meaning of Meaning*, 1923, 25)。

我々の知的伝統の生息地のまだほとんどを占めている隠喩は、底深い大洋である。社会世界を理解することは、基礎となる宇宙のむしろ安定した一定の規則、規範を発見するために、大洋にもぐることである。「私は燐光蛍花火ショーに参加していた Bahia 近くのある夜を思い出す。真の明かりで夜を突き刺すことはなく、青白い光が輝き、消え、また輝いた。それは催しごとであった。その輝きのかなたは、暗闇が支配していた」(Braudel, *On History*, 1980, 10-11)。隠喩としては、支配している暗闇や動かない大洋は我々の時代の反イメージなのである。その時代とは、表層の経済を作り出している多国籍資本とデジタル資本主義の時代である。大洋の深さや夜の暗闇によって含意されているものは、直接に経験できないもので、我々の経験的能力の感覚下に横たわっているものである。この論理に従えば、飛び跳ねる波や光り輝く蛍のような早く動いているものが社会世界の表層で移動することは、皮相で意味のないものと考えられるであろう。

今日そのような隠喩を使用することには危険が潜んでいる。なぜなら、特に大量通信分野での新しい技術的発展が導入されて、それによって支援されている現代世界においては、そのような隠喩は変化の重要な側面を見失わせるからである。我々の知的好奇心が我々世界の深遠な洞察を怠るべきでないことは疑いのないところである。すなわち、インテリは短い波や蛍になるべきではない。しかしながら、注意すべき重要な点は、社会世界の表層での存在、すなわちその表層に住むというこの新しい仕方が出現したことである。社会的世界の表層で生存するというこの新しい生き方は、歴史のこの瞬間における日常生活の我々の経験の特徴である。適切であるかどうかかわからないが、それは“表層の現象”と呼べるものである。

動かない大洋や行き渡った暗闇のイメージと対照に置かれるこの現象は、長い歴史的転換の中で差異の瞬間を表している。それは他者への我々の関係を変えている。過去と将来への我々の関係を変更している。我々の現実感覚を修正している。つまり、世界における我々の存在にインパクト与えている。今日の予想からでさえ明日は我々の目には明らかではないが、我々や他人に意味のある用語では、談話の異なる経済あるいは異なる談話形成、すなわち“表層の経済”の新しい可能性があることは確実である。それは稼動している、投資や資本蓄積における法人、多国籍企業など実際の経済の一部であり、既存の世界市場に支えられ、あるいはそれを支えているものである。中華人民共和国はそのようなものの中に引き入れられている。そのような現象の法則や論理は、テキスト (text) のネット上のサイバー空間で最も良く具現されているが、経済上の法的性格である取引の形態での交換を伴うことをも示唆している。

この経済の生息地は「ここと今」や「そこと当時」よりもむしろ「そこと今」である。この経済においては実際の空間的距離として理解される「そこ」あるいは「その外」として理解されるものは、ちょうど人類学者がはるか離れたところにフィールド調査に出かけるときに他の人々や文化に関して言及するときを使うように、自分自身が今いるその瞬間の中で構成されている。すなわち、自分自身の現在の瞬間の構成は、常に到達可能で接続され利用可能な他の場所での現在に不可避免的に結び付けられている。もう一つは、今の瞬間における我々と他者との接触を常時可能とする大量通信手段によって生み出される、滑りやすい表層ゆえに自分に対するそこである。そのような視点から見ると、地域研究の概念は問題となることがわかる。なぜなら、地域的地理の定義に本質的である物理的距離は、実質的に今の瞬間に矮小化され、「今」と「そこ」に基づく新しい経済の部分になるからである。

社会的表層の概要

この歴史的転換の現時点での、社会的意義の大きい広大な大陸の新しい表層の特質を引き出そうとして、中華人民共和国の顔の概要をスケッチすることを想像してみると、この活気あるがなおどこか不安な顔立ちの際立った特徴のいくつかを見落とすことは困難であろう。

革命と社会主義の過去を心に留めるならば、人民共和国の顔に整形手術が行われたことに気付くであろう。なぜなら、社会的世界の表層はよりスムーズになって滑りやすく、容易なアクセスと移動が許容されている。ある角度からの観察では、印象になるが、インテリや出稼ぎ労働者は毛沢東時代に移動を妨げた文化的障害や社会的障壁がなくなり、巨大な氷の上をスケートするように次から次へ移動しているといえる。それにもかかわらず、社会的くぼみと溝は、隠喩と文字通りの意味で、公式統計年鑑に示されている貧富の格差の拡大のように、深化し、拡大し続けている。他方では、社会的くぼみや溝が生活に意味をなしているとの理解の伝統的な境界が分解しているか溶解している、との間違えような感情が多くの人によって共有されている。

この新しい顔あるいは社会的表層は、我々の顔の表現や社会的感情における1組の異なる可能性を形成するために、我々の日常経験のデジタル転換によって生まれた、特に電子や写真のイメージであるイメージ上の表現からなるものである。そのような顔あるいは新しい社会的表層を見るとき、時々、いかなる者からみても、すなわち貧困にとらわれている者や富の階段を駆け上っている者の見解にかかわらず、複数の視覚のパノラマはすべての人の目のために作られたように感じるであろう。それは人々をして、文化的境界や社会的階層が、社会の純然たる運動によって超えられるか克服されたように感じさせられるだろう。それは、すべての人が同じように旅行するように感じることである。この感情は偽りかもしれない。それはまた幻覚かもしれない。それにもかかわらず、通信の新しい手段によって維持・補強されており、この感情は現実そのものであるように思われる。世界の変革している地面に立っている我々自身および人類 (ourselves/Ourselves) の理論的理解を深めるために、我々が注意を払わなければならないのは、この非現実的な現実である。我々の地球のあらゆるところで、社会的・文化的、経済的・政治的にも、その生存がイメージ上の発表や表現の使用に依存している、新たに出現している関係の制度の足跡がある。換言すれば、大量通信手段による革新と革命によって大いに影響されている、我々の経験の構造的転換が分析の緊急課題である。

例えば、今日中国で人気のある写真言語は、公的な慣行に必ずしも縛られずに「一般の人々」が生活や真実について話せる異なる環境を提供しているように思われる。人々の目の代替的なものを引き出すこの言語の決定的な特徴は、読むために集中的かつ広範囲な学習を必要としないことである。それは瞬間のもので、言葉によって仲介されず、その受理において個人的である。カメラによって伝えられたり、捉えられたりするものは、文字のテキストを解読するのとは違ってほとんどあるいは全く言葉の仲介なしにほとんど即座に理解されるものである。世界、中国で決して新しくないイメージ、テレビ、都市の広告のような写真で見ることができるようになり、異なる話し言葉の様式が現実の可能性となっている。中華人民共和国の政治的文脈を考えれば、ある意味で、想像上の言葉は大衆の言葉であり、彼らの主観性は日常生活のイメージや、人生や世界あるいは世界における人生に関する感情によって表現されるのみであり、しばしば言葉では表せないものということ

ができる。我々の今日の我々の存在を可能にしている遠距離通信そのものは、それゆえ中華人民共和国の近年の歴史において自由をもたらす機能を与えている。

この新しい社会的表層、あるいは人民共和国の顔の他の特質は、インターネット空間の出現に見られるように、口頭と文字言語の間の距離を短縮した革新的遠距離通信の導入によって影響を受けている近年のスタイルである。サイバー空間で書いたり、読んだりしているとき、書き手と話し手の間の境界がぼやけているような感じを受ける。特に、文字の表現が話の行為の瞬間を模倣したり、口頭交信の活気を模写したり、向かい合った状況を修辞で飾ろうとしたりしようとしているように感じる。Walter J. Ong がかつて呼んだ「世界の技術化」は、どんなに遠くに離れていても、インターネットの談話室のようなものを通じて人々が見知らぬ人に秘密や空想を親しく話させ、誰でもを結びつける交信の新しいプラットフォームを創出したのである。我々の他者との存在の様式の変化はテキストの生活に影響を及ぼし始めた。長いテキスト伝統の言語慣行でのこの転換の長期の影響がどのようなものであるかは忍耐強く待つ必要がある。いかに初めてであろうと、社会主義後期・近代的発展の最中にあるこの壮大な大陸の中国での都市空間の拡大を別にして、現に生じつつあるものは、著者と読者あるいは逆の関係においてある革新を示唆していると論じることができるであろう。

この議論の輪郭は歴史的鏡に多分よりはっきりと写されるであろう。もしも50年位前の毛沢東革命時代の話し言葉の意義をみても、当時は大衆が各種の政府運動に動員され、そこではある種の社会主義雄弁術が発達した。革新的革命の実践の初期の時期には、いかに話すかが非常に重要であった。例えば、毛沢東政府の大衆の動員に大きな成功を収めた「演説特訓」運動では、農民は共産党幹部から教えられるよりも、いかに古き社会の残存に対する悲痛を吐露し、毛沢東革命が破壊しようとしたものを学ばなければならなかった。いかに話をするか、どのような語彙を使用すべきかが急進的革命の時代の党の二つの主要な関心事であった。何を言い、それをどう言うかが社会を管理する重要な手段となった。後には、意味のテキスト作成に関してはより厳しい規制さえかかった。党のイデオロギー上の支配の主要な部分とみなされた原文や意味の統制は、党の創作した政治的修辞にまさに平行して大衆のために作り出された。言葉の実践の領域で、革命と社会のための談話の基盤を提供した国家・党の権威の声の明らかな刻印があった。インターネット空間が祝福されるものと理解されるのは、このような歴史的背景があるからである。著作や読書の異なる様式に対する潜在的可能性よりも現実のものを作り出すという意味で、それは差異を創出している。すなわち、発言の可能性、すなわち普通の人々がより滑らかになった社会的表層に著者として出現したことは、世界における我々の他者との関係に対する革新的感情を呼び起こすであろうし、既に呼び起こしている。

「People's Public」の誕生

社会学的投影からみて問題になっているのは、イメージ上の表現による日常経験の転換

である。私が論じるように、これは今日の世界における我々の存在の問題として、我々によって取り上げられなければならない。それは、我々・人間 (we/We) がいかに創造されているのか、我々自身と他者と一緒にいる、あるいは他者の中に入っていくこの新しい可能性の中あるいはこれを通して、の問題に本質的に帰着されるからである。それは技術的变化自身ではない。我々の焦点となるのはその社会的組織ではない。代わりに、問題とされるべきは現代の存在の問題である。我々が世界において我々自身と他者に意味のあるものになることができる方法である。

この社会技術的転換、そして社会主義後期・近代的発展にある地勢的運動の中から生まれたものが、“People’s Public”である。ごく最近まで人々をしてそのために生き、死ぬることを鼓舞した政治的想像の最も重要な象徴であった人民共和国 (People’s Republic) と対照的に、今日では接頭辞の「Re」は落とすべきである。社会学的課題は、社会的空間、政治的物事の秩序としての「人民共和国」の言葉の含意のそのような転換はどのようにして起こったかを示すことである。そして革命と社会主義、社会主義と改革、改革と市場、市場と資本主義の結合の歴史によって生まれた一つの“People’s Public”の到来を発表することである。旧政治秩序のニックネームあるいは象徴的表現である「人民共和国」は、人々のアイデンティティのみならず共産党の意思をも示していた。それは、我々が通常西洋民主政治の伝統において理解している意味における真の人々の共和国を除いて、国家、解放、政府、党自身を意味していただろう。毛沢東革命の急進的時代の期間 (1950年代～1970年代) において、人民共和国の「人民」は主にすべての労働者階級すべてを集团的に示すものであった。党だけによるその具体性と完全性を付与された大衆は、党の言葉以外の言葉を話すことができなかった。

ところで、“People’s Public”は、毛沢東政府が人民共和国の社会生活を統制する上で行ってきた方法で空間を支配する政治的権力は持たずに、異なる社会的空間を示している。“People’s Public”の領土では、しばしば「普通の人々」の名の下に複数の著者が生まれた。この出現しつつある談話空間における著述の表明者としての「人々」あるいは「普通の人々」は階級によって分断されてもいないし、国家の公的分類によっても定義もされていない。原作者や相互読者として部分的にインターネット・カフェで物理的に交信することは別にして、交信できるようになった。この新しい著述が革命や改革の特定の社会政治的文脈内で可能になった空間が、People’s Public と呼ばれるものである。

ここでの著述は、即座に社会生活の異なるイメージと異なる分析的可能性の両者を呼び出す鍵となる概念である。私の思考の基底では、順序つけたり、著述したりする新しい関係が、単に改革の制度的あるいは構造的レベルで現れているのではないとの仮定である。我々の時代の技術革新に支えられたこの“People’s Public”の歴史的到来は、発話の聴取、筆記、読書との関係あるいは逆の関係の可能性の条件を創出している。発話の可能性の条件が、我々の世界への関係を可能としている仕方で連結され、我々の位置が確定され、我々の主観が再改造され、再生されていると考えれば、この再順序付けが社会の国家に対する

考え方を一新することを我々は理解しなければならない。このように仮定された問題は、どのような談話がそのような空間で創出されるかについてのものではない。代わりに、真剣に考えられなければならないのは、発話に対するこの新しい可能性の出現である。それは我々の世界での存在に対する新しい感性である。私が先に示唆したように、国家の退却の命題は達成できなくなり、前に進めようとする慎重に考慮しなければならない。国家はエネルギー溢れ、顎を広く開けて、すべてのインターネット・カフェを閉鎖し、危険なウェブ・ページはすべて削除すると脅かすことによって、今なお走り続けている。国家が強力で、検閲を行い、統制し続けているのは事実である。それにもかかわらず、People's Public の誕生は、地勢的变化、国家とその臣下が立っている基盤の移動を示している。

読者と著者との間の空間は、まさに権威（権力）が説明される場所のものである。その空間は、経済的、政治的再編が起こっている文化的伝達の媒体に十分な注意を払うことなく、社会の構造的取り決めによって決定され、引き出される現実の社会的溝を単に反映する文化的意味を考慮したがる、伝統的社会学者によってしばしば忘れられているばかりでない。暦のないあるいは文化のない真空で読まれているテキストとして著述の意味を考えたがる人類学や文化研究の学者一般によっても忘れられている。このことが我々がまさに調査しなければならないものである。新しいタイプの著者が生まれた、経済と文化の間で交差した空間である。

人民共和国の広大な大陸で起こっていることは、歴史と政治、政治と社会、伝統と革命、社会主義と改革、市場と多国籍・資本主義——つまり、民族学的観察の地平線をはるかに超えた物事の長期間 (*longue duree*) の慣性——の地質学的運動によって創出された地勢的变化である。我々が社会学的レンズを適切に拡大することによって見ることができるのは、数十年間の過酷な人生の表現を刻んだ顔のように、異なる社会表層の形成である。最も緊急に必要とされているのは、社会制度の再編成、既存の限界化したグループのさらなる従属化、支配と統制の新たな様式の戦略、“市民社会” (*minjian shehui*) の出現、のいずれの研究でもない。日常生活において我々の経験を転換している新しい地勢的形態の出現の研究である。

Deleuze と Guattari から借用した「千年の高原」のイメージは我々にとって格好の隠喩である。「千年の高原」は、運動という点で出発点も終着点もないルートや道路の無限に続く可能性を通して継続、接続されている、表層のイメージである。そのような隠喩が採用されるならば、そのように想像された社会生活はもはや階層関係の垂直的構造とはみなされないだろう。むしろ接続や裂け目、隆起やくぼみ、岩や川、木や動物の“大地” (*terra firma*) である表層を有する山の多い風景としてみなされるものである。生活と談話がこの表層に存在しており、移動やその唯一の可能性がそのような生活や談話の秘密を内包している。すべての人やすべてのものは一つの高原から他の高原へ、一つの丘から他の丘へ、一つの平原から他の平原へ、一つの谷から他の谷へ、どこにいたかあるいはどのように感じたかをしばしば語るができないで動き、旅をする。なぜなら旅人の注意はこれら異

なる場所の景色の視覚や考察に完全に囚われているからである。我々を驚かせるのは、人の移動のスピードでもなく、彼の旅行の目的でもなく、そのような旅行が可能となる方法である。そのようなものが、私が重要なテーマと信じているものである。すなわち、表層、滑りやすい表層上での存在の感情を理解することによって、今日の世界、すなわち現代世界における存在の我々の仕方の一端を捉えることである。

歴史的意義と政治的遺産を有する“People’s Public”の誕生は、社会の国家に対する異なる関係を示すものである。公式的見解からすれば、それはまた異なる統治様式のための必要性を示している。ヘーゲルやハバーマスのドイツ哲学の伝統に近い概念を有する「公的領域」や「市民社会」という概念は、国家の中心性を概念的な分業の引力として仮定している。人民共和国の国家が実際の政治的・経済的権力であることは疑いがない。公権力がくしゃみをし、禁止し、命令すれば、壁が廃止され、人々が強制的に移動され、生産物の販売が禁止されるであろう。国家権力の圧倒的な力がそこになお存在し、今日でさえ、人民共和国の広大な大陸で機能し、営みを続けているのは事実である。それにもかかわらず、近年新しく起こっているのは、日常生活の実践においての変化である。公的な嵐が我々の行く手に再び来ないとはいえない。代わりに、現に起こりつつあることに対する可能な解釈ができる複数の空間が出現してきている。すなわち、日常生活の経験について語る空間がより「民主的」になってきて、単に党を代表する人民共和国の声の支配に拘束されなくなっている。

そのような状況が逆転されることはなく、談話的な空間の戦略的地位を再征服するために国家が公用語のみを取り戻すことが決してない、と仮定することはもちろん誤りであろう。人民共和国の広大な大陸において国家権力が、特に政治生活の一定数の社会領域において、支配し恐れられ続けているのは事実である。しかしながら、注目されるものは、国家が、普通の人々の心にある幻影のごとく複数になっている事実である。それはより大きな社会的、経済的階層化によるのではなく、異なる関係の枠組みに従って分析されることを許容する語義の複数空間の出現である。この複数性は、単に現に起こっているところに存在するだけでなく、国家によって制限されている物事の公的秩序に自らを関係させることができる仕方の中にも存在する。国家は、そのようなプロセスのむしろ外にあるよりも内にある。既知の歴史のあるいは政治的变化と対照して、それを地勢的变化と呼ぶことは、権力形態、存在方法、経験様式、統治の心的傾向すべてが既知でかつ経験のない、この(再)整理によって影響されるプロセスそのものに注意を振り向けることを意味する。

(注) 本稿はメディア・中国に関する人類学的研究であり、広範な民族学的事例・典拠はこの発表には含まれていない。

(原文は英語。邦訳 山本一巳)